

DAS KAPITAL

2024年/6月学習会の案内 第64回「資本論を読む会」

Marx

FOR BEGINNERS



頑
張
ろ
う

初
心
に
還
っ
て

6月25日(火曜日)午後6時30分
-Zoomで開催しています

「第5節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解
f アイルランド」[岩波文庫(三)p316-]。

5月27日の「資本論を読む会」は13名の参加で「e イギリスの農業プロレタリアート」をやりました。

41ページにのぼる長目の文章でしたが30分以上かけてみんなで読み通しました。今回もイギリス産業革命を経て資本主義的蓄積が進む過程での農業労働者の悲惨な実態が「これでもか!」と多くの事例が報告されています。土地所有者と借地農業経営者は「異常な富をなし」、他方、農業労働者は「白色奴隷」「農奴に転落」「自由人ではなく受給貧民」等々と呼ばれるまでに至ります。いくつか話題になった点を紹介しましょう。

303ページ「ハンティンドンシャ」という地域で「14の寝室に、大人34人と子供33人…家には便所がない。家族は小耕地まで行って排泄するか、汚い話だが…戸棚の抽斗(ひきだし)に用便するかせねばならない。抽斗がいっぱいになれば、それを抜いて、中身を必要とするところに空ける。」に続いて、「日本でも、生命条件の循環は、もっと清潔に行われている。」とあります。

エッ!マルクスが資本論の中で、日本のことを言う(引用して)いる一のです。珍しいことですね。「どうい

う意味だ?」など話題になりました。フランス語版では「もう少し長く触れられていたらしいが、削除されたようだ」との話もありましたが…。もうひとつ310ページからの、児童や少年少女の過度労働や彼らを使うギャング組織「労働隊制度」とこれを供給する村落を「ソドムとゴモラ」という旧約聖書にある退廃的な都市の代名詞で語っています。最終行の表現「雑草なき畑と人間雑草とは、資本主義的生産の一極とその対極である。」の意味については、色々と議論になりましたが「よく分かんので宿題!」ということにして終了。次回は第5節の最終項「eアイルランド」(p 316~)。レポーターはTakちゃんです。よろしくお願いします。

終了後の懇親会では、直近の話題-静岡県知事選挙の結果や、6月10日に予定している「別教室-21世紀の資本」のトマ・ピケティについての評価などが話題となりました。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-Sakaオヤジ

Special Study 6月10日(月) pm6:30-

トマ・ピケティ「21世紀の資本」

第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

e イギリスの農業プロレタリアート

資本主義的蓄積の敵対的性格が野蛮に現れている点では、イギリス農業の進歩とイギリス農業労働者の退歩にまさるものがないとして、当時のイギリスの労働者の状態をマルクスは記述しています。

農村労働者の状態は反ジャコバン戦争中は、救貧法により、露のようにはかない命をつなぐに必要な賃金が補充されてやっと生活が成り立っているような状態にありました。

近代的農業は18世紀中頃から始まりますが、1846年の穀物法の廃止を契機に農業革命が進行し、農村労働者人口の減少と同時に労働者の状態は劇的に悪化し、農村労働者の栄養状態は監獄の囚人のそれに劣るほどでありました。

・農村労働者の住居は、ますます悪化し、寝室が一つで、炉もなく、便所もなく、開閉できる窓もなく、溝の外には給水設備もなく、狭い寝室に男女の大人が、既婚者も未婚者もごちゃごちゃに押し込められ、あらゆる道徳がほとんど必然的に破壊されました。

ドクター・ハンターは全ての州において農村労働者の小屋を調査しましたが、その実態は悲惨きわまりないものでありました。

・農村では作業隊(労働隊)制度がつくられましたが、作業隊ができた背景は「農業労働者の恒常的な過剰化が生じるが一方で、収穫期などには一時的な労働不足が生じる。作業隊制度はこれに対応するものでした。作業隊は親方によって指揮・監督され少年少女で構成されるこの隊は過重労働と道徳的退廃で特徴づけられ、大借地農業者や地主の利益のために存在していました。

